

2013年10月

【報道関係各位】

〈ポーラ美術館 展覧会案内〉

ルノワール礼讃

Homage to Renoir

ルノワールと20世紀の画家たち

Renoir and Painters of the Twentieth Century



ピエール・オーギュスト・ルノワール 《髪かざり》 1888年



「レ・コレット」のアトリエでのルノワール 1918年 アンリ・マティス旧蔵

2013年12月1日(日)-2014年4月6日(日)

【報道に関するお問い合わせは】 ポーラ美術館 広報事務局 担当:増田、後藤、三井 Tel 03-3575-9823 / Fax 03-3574-0316
ポーラ美術館 学芸部広報担当:比良田(ひらた) Tel 0460-84-2111/ Fax 0460-84-3108

開催趣旨

「美しく描かなければならない」—ピエール・オーギュスト・ルノワール(1841-1919)は晩年、年少の画家ピエール・ボナールにこのように語ったといわれます。ルノワールはその若き日、同時代的な主題を描いた印象派としての活動で知られますが、画業の後半期においては、人物像や花、そして古典的な裸婦を主題に、情感を込めた筆致によりたゆむことなく美を追求し続けた画家として、同時代の多くの作家たちから尊敬されるようになります。

ルノワールとその芸術は、コレクターや批評家のみならず、20世紀の若き芸術家たちの眼をいかに魅了したのか。ポーラ美術館に収蔵されているルノワール作品のうち計14点を、4つのセクション「花」「女性像」「裸婦」「南フランスと地中海」に分けて、その芸術の特徴と魅力を再考するとともに、パブロ・ピカソや梅原龍三郎など、ルノワールの影響を受けた同時代の西洋および日本の作家の作品をあわせた計52点の作品により、20世紀前半における「ルノワール礼讃」の様相を探ります。

開催概要

- 【展覧会名】 ルノワール礼讃—ルノワールと20世紀の画家たち
- 【会 期】 2013年12月1日(日)-2014年4月6日(日) (会期中無休)
- 【同時開催】 ・特集展示 「いろどる線、かたどる色 ドガのパステル、シャガールの水彩、マティスの『ジャズ』」
・常設展示 「ポーラ美術館ガラス工芸名作選」
- 【会 場】 ポーラ美術館 展示室1 (神奈川県足柄下郡箱根町仙石原小塚山1285)
Tel 0460-84-2111 / Fax 0460-84-3108 / HP: <http://www.polamuseum.or.jp>
- 【出品点数】 52点 (うち、ルノワール作品14点+書簡1点)
- 【出品作家】 ピエール・オーギュスト・ルノワール、ピエール・ボナール、アンリ・マティス、キース・ヴァン・ドンゲン、ラウル・デュフィ、パブロ・ピカソ、ジョルジュ・ブラック、マリー・ローランサン、キスリング、ルイ・ヴァルタ、満谷国四郎、中村彝^{つね}、梅原龍三郎、小出植重
- 【開館時間】 午前9時～午後5時 (入館は午後4時30分まで)
- 【入 館 料】

	個人	団体(15名以上)
大人	1,800円	1,500円
シニア割引(65歳以上)	1,600円	1,500円
大学・高校生	1,300円	1,100円
中学・小学生(土曜日無料)	700円	500円

台湾・故宮博物院でのルノワール展について

ポーラ美術館は、台湾でルノワールが本格的に紹介される初めての機会として、台北・故宮博物院で開催された「ルノワールと20世紀の画家たち」展(会期: 2013年5月25日-9月8日、入場者数: 209,482名)にルノワール作品16点を含む計53点の作品を特別協力として出品、あわせて企画の監修を行ないました。本展は、その企画をもとに、展示構成と出品内容をリニューアルして開催するものです。



1. ポーラ美術館では初めてのルノワール展！ 日本最多のルノワール・コレクションから、14点を展覧！



ポーラ美術館は、19世紀フランス印象派の作品をコレクションの中核としておりますが、本展はその代表的な画家ルノワールをテーマとする初めての企画展となります。ポーラ美術館のルノワール・コレクションは1880年代以降、その画業のいわば後半期の作品に優品が揃っており、本展では印象派のイメージにとどまらないルノワール像をご紹介します。



2. 評価が高かったのは、印象派時代だけではない！ 後半期から晩年にかけてのルノワール芸術の優れた点を新たに紹介！

絶えず好んで描き続けた「花」と「女性像」、古典的伝統を意識して取り組んだ「裸婦」、晩年の制作拠点が置かれ、明るい色彩をはじめ晩年の画業に新たな境地をもたらした「南フランスと地中海」。ルノワール芸術の概要をたどると同時に、絶えず自らの仕事の向上をめざし続けた後半生に光を当てます。

3. ルノワールを尊敬し、影響を受けた画家たちを紹介！ マティスから梅原龍三郎、中村彝ら日本の洋画家まで



印象派の巨匠として広く知られるルノワールですが、近年注目を集めているのが、印象派を離れた後に成熟期を迎えた画家が後世の芸術家たちに与えた影響です。マティスやボナールらフランスの画家に加え、ヴァン・ドンゲンをはじめとするエコール・ド・パリの画家たち、そしてピカソにいたるまで、数多くの芸術家たちがこの時期のルノワールの影響を認め、敬意を表しています。また、梅原龍三郎や中村彝など、明治以降のわが国の画家たちにみられるルノワールの影響も検証することにより、20世紀初頭における「ルノワール礼讃」の広がりをご紹介します。

あらためて知りたい！ 画家・ルノワール

◆ 1870年代— 前衛の画家グループ、印象派の中心的存在として知られるようになる

1841年、フランス中西部の町リモージュに生まれたルノワール(1841-1919)は、まもなくパリに出て、13歳で磁器絵付け職人として働きはじめました。この仕事を通じて、当時流行していたロココ趣味の装飾技法を身につけた後、20歳でスイス人画家シャルル・グレールの画塾で絵画の修練に励むようになります。このとき、モネやシスレーら印象派の仲間と出会いました。

その後、1860年代末にパリ郊外の行楽地ラ・グルヌイエールで、モネとカンヴァスを並べて風景画の戸外制作を行った時に使われた鮮やかで大胆な筆触は、印象派の技法として広く知られる「筆触分割」の先駆けとなりました。印象派は、1874年から1886年まで計8回のグループ展を開催。ルノワールはそのうち4回参加しています。都市風俗や郊外の行楽地、そして女性像を明るい色彩と生き活きとした筆遣いで描き出した1870年代のルノワールは、印象派の代表的な画家と目されました。

◆ 1880年代— 印象派のスタイルを乗り越えようと、「古典主義」へ向かう

1880年代初頭にイタリアを旅行したルノワールは、ラファエロの絵画や古代ローマの美術といった古典的な芸術に出会い、その単純かつ力強い形態に魅了されます。40代を迎えて、印象派の技法に疑問を抱くようになったルノワールが、さまざまな手法を試みた後に辿り着いたのが、新古典主義の代名詞ともいえる画家の名前を付した「アングル様式」と呼ばれる、厳格な輪郭線と量感表現による制作です。《髪かざり》(1888年)の形態を区切る明確な輪郭と緻密に描写された立体感には、イタリア旅行後の古典主義的な作風が明確に表われています。そもそも女性の衣装や装飾の施された帽子などの繊細な描写に定評のあったルノワールでしたが、古典の研究を通じて、その様式は新たな展開を迎えたのです。



ピエール・オーギュスト・ルノワール
《髪かざり》1888年

◆ 1890年代以降— 古典主義の成熟とともに、あくなき絵画への情熱が称賛を受ける



「レ・コレット」のアトリエでのルノワール 1918年
アンリ・マティス旧蔵



パブロ・ピカソ
《オーギュスト・ルノワールの肖像》1919-1920年
パリ、ピカソ美術館

RMN-Grand Palais / Jean-Gilles Berizzi / distributed by AMF
© 2013-Succession Pablo Picasso - SPDA(JAPAN)

50歳を前にしてリウマチを患ったルノワールにとって、その後の制作活動は身体の不自由との闘いでもありました。60歳代を迎える1900年頃には、温暖な気候を求めて南フランスにしばしば滞在するようになり、ニースからほど近い町カーニュ=シュル=メールに拠点を移します。

地中海の強い光と野生的な自然に新たな刺激を受けたルノワールは精力的に制作に取り組み、その近作はパリで絶賛されて印象派の時期を超える高い評価を得て、多くの芸術家や批評家、コレクターの来訪を受けるようになります。

とりわけ、ルノワールのアトリエを訪れた画家たちを驚かせたのは、年ごとに増す身体の不自由に負けずに自らの仕事の向上をめざし続ける、職人的といえる絵画へのあくなき情熱でした。その姿は、晩年に親しかったマティスの証言に語られているとともに、多くの画家たちによる絵画やデッサンを通してうかがい知ることができます。

展覧会構成

I. 花

「ルノワールは何を描いてもその表現は花のような魅力をそなえている。」(テオドール・ド・ヴィゼヴァ)

ルノワールにとって花は、人物モデルとは異なり、より自由に美的な表現を追究できる主題として、特別な意味をもっていました。その芳しさや華やかさを伝える表現は、ほかの主題の表現にも通じるルノワール芸術の精華として、1890年代から高い評価を受けています。



ピエール・オーギュスト・ルノワール
《アネモネ》1883-1890年頃

II. 女性

「ルノワールは19世紀の女性の優美さを創造した。」(オクターヴ・ミルボー)

ルノワールは、若いときから人物肖像を多く描いていますが、仕立屋の家の息子として培った感性をもとに、巧みな色使いと柔らかな筆致で女性のファッションを描き出すことを得意としていました。その志向は、18世紀フランスのロココ絵画への関心を背景に、甘美な魅力がいっそう高められた女性表現を生み出しました。



ピエール・オーギュスト・ルノワール
《レースの帽子の少女》1891年

III. 裸婦

「私は昨日、カーニュのルノワールのところで、
これまで眼にしたなかで最も美しい裸婦の作品を見た。」(アンリ・マティス)

ルノワールの古典を重視する姿勢を最も雄弁に物語っているのが、裸婦の主題に対する一貫した取り組みです。印象派を離脱した後の1880年代に再び立ち帰ったのはこの主題であり、1890年代後半以降はルノワール芸術の代名詞として後続世代の作家たちからも惜みない称賛を受けています。



ピエール・オーギュスト・ルノワール
《水のなかの裸婦》1888年

IV. 南フランスと地中海

「カーニュはルノワールが来るのをひたすら待っていたようだった。」(ジャン・ルノワール)

人物や花の主題で知られるルノワールも、印象派の画家としての光の効果への関心から、自然の風景を描いていますが、しだいにそれは裸婦像の背景としての表現が主になっていきます。また、1900年代に入って南フランスの地中海の町カーニュ＝シュル＝メールを新たな拠点としてからは、彼の描く風景は、強い光のもとで鮮やかさを増した色彩により、古典的な裸婦表現の舞台として、あたかも楽園の様相を呈するようになります。



ピエール・オーギュスト・ルノワール
《水浴の後》1915年

作品にみる「ルノワール礼讃」

● 20世紀のルノワール評価

ルノワールは1890年代半ばから、リウマチの療養のためパリを離れて温暖な南フランスに滞在するようになり、1907年には地中海を望む村カーニュ=シュル=メールの高台に「レ・コレット」と呼ばれる地所を購入し、晩年の生活と制作の拠点とします。その一方で、1892年の大回顧展開催と作品の初の国家収蔵を機に高まり始めたルノワールの評価は、1900年のパリ万博、そして1904年に始まるサロン・ドートンヌを通して、印象派の時期のルノワールを知らない各国の若い世代の芸術家や批評家、コレクターの間にも広がっていきます。老いてなお充実した制作を続けるルノワールに直面しようと、「レ・コレット」を訪れる人々は後を絶たず、その際の記録やインタビューなどを通して、その晩年の姿と芸術は、同時代の欧米各国、そして日本にも伝播していきました。

◆ 感覚を豊かに伝える筆致—マティス 《横たわる裸婦》 1921年



©2013 Succession H.Matisse / SPDA, Tokyo

アンリ・マティス(1869-1954)は1917年12月、滞在中のニースからほど近いカーニュ=シュル=メールに赴き、ルノワールの自邸「レ・コレット」を訪ねています。そして、その約2年後にルノワールが歿するまでの間、幾度となくルノワールのもとを訪れ、自らの近作を見せて批評を求めするなど、両者は師弟にも等しい間柄となりました。

ルノワールが歿した後も1920年代半ば頃まで、マティスは主を失った「レ・コレット」をたびたび訪れ、遺されたルノワールの絵画を注意深く見続けました。まさにその時期に制作された《横たわる裸婦》は、モデルの頭部のターバンが伝統的なオダリスクの主題を示唆していますが、その四肢の伸びやかさや肉体に漲る生命感の表現が際立っています。裸婦という主題、そして描き手の感覚を豊かに伝える生き生きとした筆致には、マティスに残るルノワールの記憶が息づいているといえます。

◆ 官能的な色彩—中村彝 《泉のほとり》 1920年（大正9）

ルノワールに最も傾倒した日本人の画家のひとりが、中村彝^{つね}(1887-1924)です。《泉のほとり》には、その影響が如実に現れています。官能的な色彩で描かれたルノワールの裸体表現の特質を、光に包み込まれたかのような生命感に満ち溢れていると評した彝^{ママ}は、次のような言葉を残しています。「これを描いているのは現代ではルノアール！ルノアール唯一人だ。僕はその女を描き度く思ふ。そしてかなりの自信を持って居る」。こうした画家の言葉を強く想起させるのが本作です。3人の裸体の女性や牧人のような2人の男性と、泉の湧き出る周囲の風景とが渾然と一体化しており、あたかも理想郷のような雰囲気生まれています。



ルノワールと画家たちの交流

◆ ボナール—「美しく描かねばならない」

「私はルノワールのことをすこし厳しい父のように考えていた。」(1941年のボナールの回想)

マティスとともに20世紀前半のフランスを代表する画家ピエール・ボナール(1867-1947)は1897年、弱冠30歳の折、文芸誌『ラ・ルヴュ・ブランシュ』に掲載された自作を高く評価されたことを機に、パリでルノワールと交流を始めています。ルノワールがパリを離れてからも、ボナールは断続的にカーニュにルノワールを訪ねており、1916年頃には「レ・コレット」でルノワールと次男のジャンの姿を自ら写真に収めています。

長きにわたる交流の中でボナールの記憶に最も強く残ったのが、自らを前にルノワールが発した、「美しく描かねばならない」との言葉であったといいます。人物をはじめ身近な対象をあざやかな色彩で描き出す点で、両者のスタイルは共通しており、ボナールはこの言葉を自らに対するルノワールの教えと受けとめたのでしょう。ボナールはルノワールの歿後、その後を引き継ぐように、南フランスのカーニュにほど近い町ル・カネに拠点を据え、地中海の強い陽光のもと、その色彩表現の探究を続けていました。



ピエール・ボナール撮影
《ピエール・オーギュスト・ルノワールと息子ジャン》1916年頃
パリ、オルセー美術館

©RMN-Grand Palais (musée d'Orsay) / Hervé Lewandowski / distributed by AMF

◆ ヴァン・ドンゲン —エコール・ド・パリをとらえた華やぎと色彩

キース・ヴァン・ドンゲン(1877-1968)はオランダのロッテルダムに生まれ、1897年にパリに出て活動を始めた、20世紀のいわゆる「エコール・ド・パリ」の先駆的な画家です。フランス国外の出身者が多いエコール・ド・パリとルノワールとの関係は、これまでほとんど言及されていません。しかし、女性像や裸婦、花などの主題を描いた点で共通しているほか、彼らを含めた前衛の作家たちがこぞって出品したサロン・ドートンヌは、ルノワールが近作を発表し、同時代に大きな存在感を示していた場でもありました。なかでもヴァン・ドンゲンは、このサロンの常連であったのに加え、女性像や花の放つ生命感や華やぎを大胆な色彩表現で描き出すことを得意とした点で、ルノワールとの意外な近さを示しています。

◆ 梅原龍三郎— 西洋への憧憬、そして生涯の師として



「そら、此の画こそ私が求めて居た、夢見て居た、そして自分で成したい画である。」
(1917年の梅原の回想)

1908年7月、パリのリュクサンブール美術館で初めてルノワールの絵画を目撃したとき、梅原龍三郎(1888-1986)が残したのが、上記の言葉です。当時20歳であった梅原の感動と情熱は次第に高まり、翌年の2月にカーニュのレ・コレットに住むルノワールを訪ねました。紹介状もない突然の訪問にもかかわらず、晩年の画家はこの若者をあたかく招き入れ、絵画の指導を行います。こうして老画家との親交を結んだ梅原は、「レ・コレット」やパリのアトリエで、ルノワールの描法を目の当たりにしました。帰国後、独自の画風の確立のため研鑽を重ねた梅原は、後年、日本の洋画界を牽引する存在となりましたが、画家としての形成期におけるルノワール体験は生涯、梅原の絵画制作における拠りどころとなったのです。

市ヶ谷加賀町の画室にて(1984年:松本徳彦撮影)個人蔵



ポーラ美術館

POLA MUSEUM OF ART